



オーバーコールだから弱い？

2020.11.20

テーブルで良くこの言葉を聞くことがあります：

「オーバーコールだったから強くない、強ければダブルしてたけど」

「オーバーコールは 8 点からするけど、オープニングハンドあったからダブルしたの」

しかし現代のブリッジでは、これらの内容はすべて**間違い**です。オーバーコールに対する認識、教え方を根本的に変えなければいけません。

そもそもなぜオーバーコールは 8 点からという“神話”があるのでしょうか？いろいろ調べてみました。連盟が発行している「基礎ブリッジ」(1978 年版)の p.60 からオーバーコールについての章があり、そこから引用すると

2 オーバーコールの目的

A. パートナーにリードを示す

B. 相手方のビッドを妨げる効果がある

3 どんなハンドでオーバーコールするか

上に記したような効果がオーバーコールにはありますが、それだけにその効果があるられるようなハンドでしかオーバーコールをしてはいけません。

普通オーバーコールをするにはつぎのよう条件を満たしたハンドでなければいけません。

(a) 1 の代なら 8 ~ 15pts. 2 の代はもう少し強いハンド。

(b) かならず 5 枚以上あること

(c) 5 枚ならそのスーツにアナーが 2 枚以上あるようなしっかりしたスーツであること

16pt.以上持った強いハンドでは 1 の代のオーバーコールをしてはいけません 16pt.のハンドはテークアウトダブルをかけてから、次の機会に自分のスーツを示します。

この教科書は 4 枚メジャーであり、今では誰も使っていないと思います。しかし 1980 年代ごろまでにブリッジを習った人達は使っていたと思います。だからこの年代までにブリッジを覚えた人達はオーバーコールに対してはこの教科書に沿った考え方をしているでしょう。これを見ると確かにオーバーコールは弱い、強ければダブルから入ると読み取れます。だから冒頭の発言がでてくるのももっともでしょう。しかもこの教科書ではオーバーコールの目的にコントラクトを取ることが入っていません。

連盟の新しい教科書と言えば「5 枚メジャー基礎コース」(1999 年版)があります。これを見ると p.108 にダイレクトオーバーコールの項がありそこから引用すると：

(1) オーバーコールの目的

オーバーコールの目的は次の 3 つです。

a) 自分たちでプレイする

b) パートナーにリードを示す。

c) オポネントのオークションを妨害する

3 つの目的を兼ね備えたハンドなら理想的ですが、実際には都合の良いハンドばかりが来るとは限りません。3 つの内、2 つの目的が達成できそうなハンドでオーバーコールします。

となっています。先の「基礎ブリッジ」と比較するとオーバーコールの目的に自分たちでプレイする=コントラクトを取るということが第一に加わってきています。これは重要なことで、もはやオーバーコールは“お邪魔ビッド”というような考えをしてはならないということを意味しているのです。新しい考え方ではオーバーコールというものは“対抗オープン”と考えるべきです。「相手はオープンしたがこちらも対抗してオープンします」というべきハンドですという意味を持っているということです。違いは Jxxxxx の様なハンドはそのスートでオープンしてもおかしくありませんが、オーバーコールでは、それがいくら対抗オープンだとしても、決してしません。なお 2 の代のオーバーコールについては、これはオープンするときに

1 でオープン、同じスートを 2 でリビッドするようなハンドであると規定します。

やはりオーバーコールは“お邪魔ビッド”ではなく“カウンターオープン”と言うべきものです。普通のオープンと違う点は、Qxxxxx では 1 でオープンしますが、1 でのオーバーコールはしません。スートクオリティも問題にします。

例で考えると

♠ AQ976 ♥ KJ108 ♦ 6 ♣ AQx

のようなハンドを持っていて、自分の右が 1 D でオープンしたとすると、昔にブリッジを習った人はほとんど考えることなくテークアウトダブルをするでしょう。しかし現代のブリッジではまず 1 S とオーバーコールします。これはスペードのスートクオリティが良いからオーバーコールが出来るので

♠ Q9876 ♥ KQ108 ♦ 6 ♣ AQx

の様なハンドだとまずテークアウトダブルが適切です。

それから最初の例で

1 D - 1 S - 2 D - P

P - ?

と回ってきたら、?でのダブルはテークアウトになります。